様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 6 月 20 日現在

機関番号：２４６０２
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2008～2010
課題番号：20510235
研究課題名（和文）　経済成長下の南アジア地域における宗教と観光に関する比較研究

研究課題名（英文）　A Comparative Study on Religion and Tourism in South Asia under Economic Growth.

研究代表者
中 谷 哲 弥（NAKATANI TETSUYA）
奈良県立大学・地域創造学部・教授
研究者番号：　５０２８５３８４

研究成果の概要（和文）：近年、経済成長によって注目される南アジア地域のうち、インドとバングラデシュを取り上げて、経済成長にともなう中間層の台頭と人々のライフスタイルの変容に関して調査研究を行った。具体的には観光と宗教という側面から調査研究を行い、その結果、いずれの国においても、よりレジャー的な観光が拡大する傾向にあることや、消費社会に融合するような形で宗教が埋め込まれ、ひとびとに受容されるようになっていることが判明した。

研究成果の概要（英文）：South Asian countries recently attract attentions because of their rapid and steady economic growth. This study picked up middle class people of India and Bangladesh and studied their life style in the aspects of tourism and religion. As a result, it was revealed that middle class increasingly enjoyed leisure tourism and their religious life has been incorporated into consumer society.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,500,000	450,000	1,950,000
２００９年度	1,100,000	330,000	1,430,000
２０１０年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	3,600,000	1,080,000	4,680,000

研究分野：複合新領域（南アジア地域研究）
科研費の分科・細目：地域研究・地域研究
キーワード：観光、宗教、南アジア、文化人類学、中間層

１．研究開始当初の背景
(1)近年、安定的な経済成長を続ける南アジア地域への関心が高まっている。実のところ、この地域での経済自由化や経済成長、それに伴う人々の消費生活については、かなり早い時期から大きな関心が払われてきたものの、先行研究では、自動車や家電製品などの耐久消費財に関する消費行動がもっぱら取り上げられるのみで、より包括的な人々の社会生活についての目配りは不足していた。
(2)経済成長によるミドルクラス層の増加は、一定の可処分所得を享受する給与所得者（いわゆるサラリーマン）の増加を伴い、この点で仕事と余暇が時間的にも消費行動としても、はっきりと分別される余暇社会がすでに成立しつつあると考えられるのであり、この観点からの調査研究の必要性が高まっていると考えられる。

２．研究の目的
(1)余暇活動の実践のひとつである「観光」に注目することで、余暇社会が到来しつつある南アジアの人々の生活やライフスタイルの現状をより包括的に捉えること。

(2)あわせて南アジア地域において人々の社会生活に大きな影響をもっている「宗教世界」にも注目し、消費社会・余暇社会の中にいかに宗教が組み込まれ、いかに人々が宗教を捉え直しているのかを明らかにすること。

３．研究の方法

(1) 両国の観光関連の省庁を訪れ、統計データ、年次報告書、観光に関するマスタープランなどの資料や観光パンフ、旅行雑誌、新聞広告等の収集を行った。

(2)両国の観光関連の省庁及び民間旅行会社等でのインタビュー調査を実施した。

(3)インドの首都ニューデリー及びバングラデシュの首都ダッカにおいて、中間層が多く通う大学において、観光経験に関する質問紙調査を実施した。

(4)両国において一般的な観光地及び聖地などの宗教関連の観光地を訪問調査した。

(5)インドでは中間層家族の家族旅行に同行して参与観察調査を行い、バングラデシュでは外国人・国内中間層向けの農村観光地を訪問調査した。

４．研究成果

(1)南アジア地域では、国内観光者の数は増加傾向にあり、仕事と余暇の領域がはっきりと弁別される中間層のライフスタイルにおいて、観光がひとつの重要性を持っていることが確認された。インドとバングラデシュを比較すると、インドの方が様々な面で、すでに観光が中間層の人々の生活において埋め込まれている度合いが高いことが明らかとなった。インドでは、国内観光向けの各種広告は年々増加し、ネットによるホテルや交通機関の予約・クレジット決済も一般化してきている。また、公務員や民間フォーマル・セクターの被雇用者達は有給休暇などの労働環境が、かなりしっかりと整っている。

(2)観光者の数も増加傾向にある。バングラデシュでは統計の不備により数的な把握は困難だが、インドでは政府統計によると、1998 年には 1 億 6800 万人であった国内観光者の数は 2009 年には 6 億 5000 万人に増加したとされる。

(3) インドとバングラデシュ両国の中間層の観光行動調査の一環として、中間層の子弟が多く通う大学において、訪問先、期間、目的、同行者等に関する質問紙調査を実施した結果、インドではここ 10 年ほどの間に観光目的の大きな変化があったことが判明した。

①かつてインドの政府系研究機関が実施した『国内観光調査 2002-3』では、観光目的の 60%程度が友人･親族訪問、結婚、生誕･死去などの機会による「社会目的」であり、「宗教や巡礼」目的が 15%、「ビジネス・商業」と「レジャーやホリデー」などはともに５%前後にすぎない結果が出ていた。

②しかし、本研究において 2010 年 2 月にインドのニューデリーで実施した質問紙調査結果では、観光目的は大きく変動し、今や 60%を占めるのは「レジャー・ホリデー」であり、「親族・友人訪問」は 11%でその他の社会的目的」は７%、にすぎないことが判明した。「宗教目的」との回答は 11%であった。

③バングラデシュについては政府等による先行調査がないために観光目的の変動については不明だが、首都ダッカにおける同様の質問紙調査では「親族・友人訪問」は 16%、その他の「社会的目的」は 4%であるのに対して「レジャー・ホリデー」は 44%と最も高い割合を示していた。また、これに次いで「研修・学習」が 31%と高く、「宗教目的」は 3%であった。

④今日の両国においては、観光目的は社会的なものよりも、レジャー的なものへと大きくシフトしていることがあらためて明らかとなった。特に、インドの方がバングラデシュよりも、よりその傾向が強い。同時に、割合は高くはないものの、どちらの国においても「親族・友人訪問」や「宗教目的」などに一定の割合があることは、この地域の特徴とみてよい。

⑤経済成長に伴う所得の向上については、これも大きな変動があったことがうかがわれた。インドの『国内観光調査 2002-3』では年間所得 16 万ルピー以上（1 ルピーは 2010 年時点で約 2 円）が「高所得層」とされ、その割合は都市部に限っても 10%にすぎなかったが、本調査ではこの層が 80%を構成していた。さらに、当時には階層として想定できなかったであろう 50-100 万ルピー未満の層は 12%、100 万ルピーを超える世帯も９%含まれるなど、この 10 年ほどで急激な所得の向上があったことがうかがわれた。

(4) インドでの中間層家族の家族旅行への同行調査から、今日の中間層家族においては余暇の過ごし方の選択肢の中には明確に観光があることが判明した。病気休暇、有給休暇とその年度をまたいでの繰り越し、中央政府の公務員には職級別の旅行費補助付きの休暇など、フォーマル・セクターの労働環境はかなり整っており、観光への関心は高い。また、シンガポールやタイなどの近隣諸国への外国旅行もすでに視野に入っている。

(5)バングラデシュでは、同行調査は実施しなかったものの、国内中間層及び外国人を主たるターゲットとしてフェアトレード的な形で手工芸品の販売や農村観光を催行する現地ＮＧＯを取り上げて、団体代表へのインタビューや首都ダッカ郊外の農村観光拠点への訪問調査を実施した。これにより、バングラデシュの中間層はインドの中間層同様に、自国の農村文化や宗教伝統を余暇やレジ

ャーの領域において対象化しつつあることが判明した。
(6)インド・デリーで中間層の居住地において毎年開催される宗教行事についての調査では、人々の日常生活には宗教的な実践が根付いているものの、個人の家庭を超えた共同体的な催事の際には、その都市的な環境及び商業主義の介入によって、宗教行事の会場には企業広告が多数掲げられ、企業が有力な行事のスポンサーとなっている状況が生まれていることが判明した。そうした中で、宗教儀礼に加えて、コンサート、ダンス、仮装大会、料理コンテストなどの世俗的な楽しみの要素が増え、宗教行事がこれらの点では娯楽化している。また、これらの宗教行事がイベント化することで、宗教的な信仰対象としてだけではなく、観光対象化している面がうかがえた。
(7) バングラデシュのクシュティア県にある有名な聖者ラロンの廟においては、もともとその廟を管理していた宗教実践者が政府によって排除され、かわりに政府によって聖廟の観光地化が図られる事象が生じていた。政府は、そもそもイスラーム教とヒンドゥー教の両者にかかわっていた聖者ラロンをイスラームの聖者と定義し直した上で、ラロン廟を観光地化しようと試みているのであった。この事例は、宗教や観光の領域に政治が介在していることを示していた。
(8)インドでは、政治権力による観光と絡んでの宗教の明白な政治的活用は見られないものの、国内向け観光キャンペーンにおいて「世界の中でインドが一番」というフレーズを掲げるなど、観光の脈絡において自国への誇りを醸成しながら国内観光へと誘う試みがなされていた。
(9) 今後、中間層による国内観光は外国人によるインバウンド観光ともクロスしていく可能性があり、経済のグローバル化とともに社会生活の領域においてもグローバルな領域との接合が生じる可能性がある。
(10)以上のように、インドやバングラデシュにおいては、経済成長にともない、所得の向上と消費生活の変化が生じており、余暇の過ごし方としての観光の意義は高まっている。今後もかなりの経済・社会的変化、ライフスタイルの変化が中間層の人々に生じるはずであり、南アジア地域の社会研究においては、本研究のような経済成長を社会・文化面からとらえる研究の意義が高まっていくものと思われる。
(11)本研究は、従来のインド社会研究の中に位置づけても有意義な面を有している。従来のインド社会研究の関心は、いわゆる「伝統」社会に向いており、その結果、調査対象はより自律的で閉じていると想定されていた農村研究が中心であった。しかし、今日、農村においても大きな変化は生じており、自律的な社会空間という前提も学問上の妥当性を欠いていることは明らかとなっている。したがって、本研究が試みたような観光研究の視点は、従来軽視されてきた都市研究として、さらには現代南アジア社会研究として、今後さらなる貢献が可能であると考えられる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 7 件）

① 中 谷 哲 弥、「新興国における中間層の拡大と観光－インドにおける国内観光の動向を中心として－」、『地域創造学研究』（奈良県立大学研究季報）、査読無、第 20 巻（3）、2010、pp.127-155.
② 外川昌彦、「ガンディーと共に暮らす－1930 年代の日印関係と藤井日達のインド体験」、『東洋文化研究所研究紀要』、査読有、第 159 巻、2010、pp.322-360.
③ 中 谷 哲 弥、「聖者と詩聖－ガンディーとタゴール」、『季刊民族学』、査読無、131 号、2010、pp.34-35.
④ 外 川 昌 彦、「マハトマ・ガンディーと藤井日達―1930 年代の日印関係」、『宗教研究』（日本宗教学会）、査読有、363 号、2010、pp.395-396.
⑤ 外 川 昌 彦、「ガンディーが歩いた道―1946 年のノアカリ暴動と今日の南アジア」、『季刊民族学』、査読無、131 号、2010、pp. 40-45.
⑥ 外 川 昌 彦、「バングラデシュに残されたガンディー・アーシュラム」、『サルボダヤ』、査読無、2009（10・11）、2009、pp. 31-36.
⑦ 外川昌彦、「創られた『ヒンドゥー教』－ベンガルのチャイタニヤ伝における ”Hindu” の用法について」、『宗教研究』（日本宗教学会）、査読有、第 356 号、2008、pp. 25-46.

〔学会発表〕（計 11 件）

① 中谷哲弥、「インドにおける観光政策と近年の観光動向－国内観光を中心として」、観光と社会・文化の研究会、2011 年 3 月 12 日 、奈良県立大学
② Masahiko Togawa, “Hindu Muslim Relations in a Saintly Cult in Bangladesh: Religious Tolerance and Co-existence”, International Conference at Jadavpur University, Kolkata, India, 2010 年 12 月 12 日, Jadavpur University, India
③ 外川昌彦、」「パネル・宗教とツーリズム」

（コメント報告）、日本宗教学会、2010年9月5日、東洋大学

④ Masahiko Togawa, “Historiography of Caitanya in the Gaudiya Vaisnava Literature”,国際宗教学会(IAHR), 2010年8月17日, トロント大学（カナダ）

⑤ Tetsuya Nakatani, "Neighborhood and Urbanization in Delhi: Durga Puja in a Bengali Displaced Persons Colony", The City in South Asia Conference (July 18th to 20th 2010), 2010年7月18日、National Museum of Ethnology, Osaka.

⑥ 中谷哲弥、「インドより奈良を想う －ヒンドゥー教の祈り」、奈良県立大学・奈良国立博物館　合同公開講座、2009年9月13日、奈良国立博物館

⑦ 中谷哲弥、「観光/文化表象」、シンポジウム『南アジアが変わる　南アジアで変わる： 実践知の展開とその可能性』、第42回南アジア研究集会、2009年7月19日、旅館　伯梁（静岡県）

⑧ 外川昌彦、「バングラデシュのある聖地における観光施設建設計画　－文化人類学からの視点」、日本建築学会・中国支部・建築計画委員会、2009年2月27日、広島工業大学

⑨ 外川昌彦、「バングラデシュにおける聖地と観光開発―聖者ラロン・シャハとその聖者廟を事例として」、筑波大学・観光と聖地の研究会、2008年12月21日、筑波大学

⑩ 中谷哲弥、「現代アジアと観光－無形文化遺産、伝統文化、宗教表象をめぐって」、観光と社会・文化の研究会、2008年11月29日、 奈良県立大学

⑪ 外川昌彦、「ユネスコの無形文化遺産とバングラデシュのバウルの歌」、観光と社会・文化の研究会、2008年11月29日、奈良県立大学

〔図書〕（計９件）

① Tetsuya Nakatani, United Nations World Tourism Organization (UNWTO), “Profile of Religious Tourism in Japan” in *Religious Tourism in Asia and the Pacific*, 2011, pp. 177-188.

② 中谷哲弥、ミネルヴァ書房、「巡礼観光」、「聖－俗－遊」、「宗教と観光」、「インド－聖地巡礼」、「聖－俗－遊」、安村克己・堀野正人・遠藤英樹・寺岡伸悟編著『よくわかる観光社会学』、2011、pp. 46-47、pp.72-73、pp.92-93、pp.180-181.

③ 外川昌彦、佼成出版社、「シンクレティズム」、下田正弘・林行夫編『新アジア仏教史』、2011、pp.106-108.

④ 中谷哲弥、世界思想社、「多宗教世界」、田中雅一・田辺明生編『南アジア社会を学ぶ人のために』、2010、pp. 92-103.

⑤ 中谷哲弥、晃洋書房、「フィルム･ツーリズムにおける観光地イメージの構築と観光経験」、遠藤英樹・堀野正人共編著『観光社会学のアクチュアリティ』、2010、pp. 125-144.

⑥ 中谷哲弥、ダイヤモンド社、「バングラデシュの観光事情」、『地球の歩き方　バングラデシュ』、2010、 pp. 198-199.

⑦ 外川昌彦、世界思想社、「ヒンドゥー教―植民地主義的構築説をめぐって」、田中雅一・田辺明生編『南アジア社会を学ぶ人のために』、2010、pp. 104-115.

⑧ 外川昌彦、世界思想社、『宗教に抗する聖者―ヒンドゥー教とイスラームをめぐる「宗教」概念の再構築』、2009、総頁308.

⑨ 外川昌彦、NHK出版、『聖者たちの国へ－ベンガルの宗教文化誌』、2008、総頁268.

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
中谷　哲弥（NAKATANI TETSUYA）
奈良県立大学・地域創造学部・教授
研究者番号：50285384

(2)研究分担者
外川　昌彦（TOGAWA MASAHIKO）
広島大学大学院・国際協力研究科・准教授
研究者番号：70325207

(3)連携研究者
なし